



welcome

研究の考え方をもちた薬剤師を育成 お互いに教え、学びあいながら培う実践力

大学院医歯薬学研究部 薬学域 教授 阿部真治研究室

◎ナビゲーター

大学院 薬科学教育部 博士前期課程 2年 宮河 真由 (みやがわまゆ)

薬学科 6年 古賀 彩花 (こがあやか) 桶本 明日香 (おけもとあすか) 又吉 かれん (またよしかれん)



研究室のみなさん。左端が阿部先生。周りからも「仲がいい研究室だね」と言われることが多く、和気藹々とした雰囲気。研究室内では誕生日の人に大量のお菓子をプレゼントするという風習が定着しつつあるそうです。



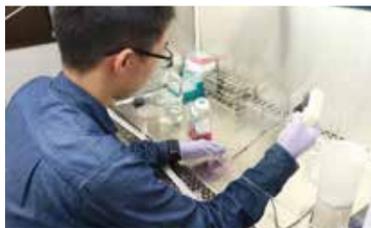
写真左から宮河さん、又吉さん、桶本さん、古賀さん。



アメリカの薬学部とのビデオ会議システムを用いた症例検討会の様子。阿部先生が窓口となって、学部間協定校のノースカロライナ大学薬学部と毎年4回程度、英語でのリアルタイムのディスカッションを行っています。これからの薬剤師に求められるグローバルな知識や考え方を習得するため、研究室の学生も参加しているそうです。



論文について話をする桶本さんと又吉さん。大量の論文を読み込むなど、地域医療はこうした陰の努力にささえられています。



実験の様子。

とが私の研究です。薬剤師として働き出したときに必要となる資料の読み解き方などを学生時代から身につけることができると思い、このテーマを選択しました」。

宮河さん、古賀さんとはだいぶ違うテーマですが、行き詰まると「どう思う？」と二人に意見を求めることもあるそうです。週に1回の報告会で情報共有もしているそうですが、普段のおしゃべりでは

ぼかすことができるほど研究室全体の仲がいいそうです。

地域の薬剤師活動の

新しいスタンダードとなる

教育モデルを徳大から発信！

ナビゲーター4人の中でも「地域の薬剤師活動における新しいスタンダードとなる教育モデルの確立」という壮大なテーマに取り組んでい

るのが又吉さんです。

超高齢化社会となった現在、地域薬局や薬剤師が果たす役割は多岐に及びますが、地域や個人の状況によって差があります。したがって利用者が等しくサービスを受けられるためにも、こういった活動を行うべきか、地域で何が必要とされているかといったデータに基づいた教育システムを確立することが求められています。

薬剤師の視点から 新しい治療法を見つけ出す

今回取材に伺ったのは臨床薬学実務教育学分野という、研究の考え方をもちて臨床現場で働く薬剤師の育成を目的とした研究室です。平成17年4月に「臨床薬学実務教育室」として開設され、平成28年4月に大学院が併設されたことで研究室になったそうです。

研究室内ではいくつかのプロジェクトが並行して進んでいます。宮河さんと古賀さんが行っているのは、薬剤師の視点から新しい治療法を開発する研究です。主にガンに対する抗体医薬の開発を目指し、細胞実験や動物実験を行っています。

この研究室を選んだ理由を尋ねると、「高校生の頃に参加したオープンキャンパスがきっかけ」という宮河さん。オープンキャンパスは他大が行ったものだったそうですが、そのときに抗体医薬の研究を目にし、中でもガンに関する研究がしたいという思いを持ち続けていたといいます。

実験はペットを使った細かい作業が多いそうで、古賀さんは「その作業をリズムよくできるようにしようと楽しい」と話します。これ、実は「研究者あるあるなんだとか。「リズムよくできる」ということは、手際

よくできるようになっている証拠」と評する阿部先生。単純作業の繰り返しの中でも、自身の技術向上に気づいたり、些細なことに楽しみや喜びを見いだす感性が、薬剤師の仕事が続けていく上で大切と説きます。

2人が取り組んでいるのは「悪性胸膜中皮腫に対する新規抗体医薬の開発研究」です。いい結果が得られれば臨床実験へ移り、スムーズに新薬としての活用をはじめられるよう、医学部や他大とも協力して研究を進めています。

複数の論文を読み解き、 根拠を創り出すメタ解析に挑戦

一方、桶本さんと又吉さんが取り組んでいるのはデータを使った研究です。

桶本さんは、無数の論文の中から正確性の高いものを選び、Aという薬を使った方がいいかどうか、新しい根拠を創り出すメタ解析を行っています。

「実際に現場で働いている薬剤師さんやお医者さんも、無数の論文を読んでその薬を使うかどうかの判断をしています。現段階でその薬を使っているものは、研究論文のデータをまとめてみないと分からないので、基本的には論文を読むこ

そこでまず、徳島県における在宅医療について把握するため、訪問看護ステーションに勤務する看護師を対象に、「県内でのどのような疾患が多いか」「看護師が薬剤師に求めること」といった内容でアンケート調査を実施。その内容をもとに教材を作り、下の学年への講義も行って、教育効果が上がっているかどうか、教育システムの評価を行いました。

「アンケートによると、薬剤師に必要と思われる資質やスキルは、相手の話をよく聞く姿勢や思いやり、いたわりの心」でした。また、看護師さんが薬剤師さんに望むことは、服薬支援や他の職種との連携強化。この内容を反映した講義内容を作成しました。徳島県内で訪問介護のサービスを受けている方の症状として認知症やがん終末期が多かったため、これらの患者さんをモデルとした症例検討なども行いました。又吉さんの代から始まった新しい研究ですが、ゆくゆくは徳島大学発の教育モデルとして全国の学会で発表し、地域医療を担う若い薬剤師の「助となること」を目指しています。

コミュニケーションを大切に 地域で愛される薬剤師に

今号が新入生歓迎号なので新入生へのメッセージをお願いすると、「大学生になったら今までは違う楽しさがたくさんあるけど、卒業しても勉強は続くので、勉強も手を抜かないで」、「大学時代はあつという間。海外旅行など、やりたいうことはやるべき」、「予定を立てて計画的に時間を使って」と実感のこもったコメントと共に、新しくこの研究室に入った人には「自分達が学んだことを教えてあげたい」といった思いも聞くことができました。

薬剤師として社会に出れば、患者さんへの指導や後進の指導など、教える機会も増えるため、「学生のうちから教えるということに興味をもってくれているのは嬉しい」と阿部先生。学生のみなさんは様々なシーンでの対応力を養うため、アルバイト先などでも意識的にコミュニケーションをとるよう、心掛けているそう。「お客様から商品について質問されることもあれば、世間話をすることもあり。それに応えることは薬剤師として働く上でも大事だと思っているので、バイトもがんばっています」。薬剤師という明確な目標に向かってお互い研鑽し合う姿はキラキラしていて、彼女たちが新入生の道しるべとなっていくように感じました。